

東京バッハ合唱団 月報

[第 600 号] 2012 年 6 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.600

June 2012

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

友あり 四方より集う 楽しからずや

合唱団の 50 年の誕生日

大村 恵美子

学生の頃から始めた合唱団が、戦後の日本を生きぬいて、50 年の誕生日を迎えることになりました。

来たる 7 月 8 日の記念懇親会には、1950 年代に知りあって今日に至るまで、変わらぬ友情で見守ってくださった畏友方のお一人、86 歳の笠原芳光先生が、こころよく講演をお引き受けになられて、奥様ともども神戸からいらしてくださいます。

題して「逆説とは、なにか？ 一宗教より宗教的なもの」。

いま、今年の 3.11 以来、「神も仏もあるものか」という内心の疑念が、日本中にゆきわたっています。キリスト教界でも、〈エキュメニズム〉を高唱しつつある昨今ですが、私自身は、とてもそんなものでは、今の地球状況には間に合わない、とますます感じてきているところです。キリスト教諸教派間で、既成の教義中の、あれはだめ、これはいい、などと小手先の妥協をすり合わせているだけで、何十億の地球住民を相手に、何ができるのでしょうか。世界大戦が終わったあと、アジア・アフリカの解放に大きな夢をいただき、植民地の独立がつぎつぎと現実化され、私たち日本人は、平和憲法をいちやくかざして、世界中に生きる喜びを種まいて回ろうと、心底から誓ったものでした。

ところが、21 世紀に入っても、戦時中よりはるかに多数の紛争の犠牲者が山と積まれ、国内、隣国間、そしてイデオロギー・宗教・民族の対立地域間で、人類史上もっともエスカレートした殺し合いが、性懲りもなく、日々激化しているのです。

高さを競うバベルの塔建築に余念のない人間たちは、地面から動植物をつぎつぎと死に絶えさせ、海や地下に汚染を一気にまき散らして、うすぎたない貧民同胞たちの命を、金に換えて儲けようとするばかり。ただ自分自身の命だけは安全とばかりに除外する愚かさには、驚くほかありません。

私は、どんな宗教組織も、どんな政治制度も信用しないアナーキスト風人間で、理屈の整合性には、もはや興味がなくなりました。ただ、こどもは無事に育てよ、おとなは生きがいを感じて働かせよ、年寄り安心して最後の眠りにつかせよ、地球も宇宙も余計にい

じり回さず、自然のままに尊重せよ、あたりまえの付き合いで日常生活の安定を生み出せ……、こんなことを、一人でも多くの同時代人と合意しあいたい。それだけなのです。

3.11 を期して、ぜひこういう日本に変わりたい。そのような念願とともに、7 月 8 日のみなさまとの出会いを待ちのぞみます。

笠原先生は、なんだか私に、以前につくったパンフレットがおもしろかった、と言ってくださいました。それは、2004 年の創立記念懇親会の引き出物にと、私が用意した小冊子で、当時、翻訳（英→日）が出版されたばかりの鈴木大拙著『神秘主義—キリスト教と仏教』から、気にかかったところを抜粋・引用しただけのものです。問題の多い内容のものですが、私はそれ以来 8 年間、あらためて笠原先生のご感想、ご意見を伺いたい、と思いつづけていました。今回のお話の内容と無縁ではないと信じますので、くどいようですが、当時の体裁のまま、皆様にもお目通しいただき、懇親会当日の接点を見出すすがにでもなればと、この月報に同封させていただきます。

笠原先生、おわずらわしいでしょうか。それとも、この思惑に乗っていただけるでしょうか。

先月号（599 号）の三浦隆様（後援会員・元団員、大船渡市議会議員）の文章「希望のありか — 3.11 をこえて」に、蓋あけしていただいた思いで、心をときめかしています。（主宰者）

月報 CONTENTS [第 600 号] 2012 年 6 月

- ・「《マタイ受難曲》、入門の入門。」演奏会に参加して p.2
- ・《マタイ受難曲》、入門の入門。はじめに（レジューム） p.3
- ・ドイツ大使館ご挨拶 創立 50 周年記念公演に寄せて p.4

<同封>

冊子「創立 42 周年によせて」/ 50 周年懇親会ご案内（返信はがき）/ 第 107 回定演チラシ/ 《マタイ》児童合唱団員募集

●ガリ版刷りから始まった当「月報」、めでたく 600 号を迎えました。12 ヶ月×50 年=600 号。HP 新装オープンです。

「《マタイ受難曲》、入門の入門。」 の演奏会に出演して

高井 卿介 (団員・テノール)

私は今年の4月に当合唱団に入団して《マタイ受難曲》の練習を始め、本日の入門の入門の演奏会に出演するという大変無謀なことを致しました。それ以前には、某合唱団に昨年の10月に入団して《ヨハネ受難曲》のドイツ語での練習に参加、今年の3月の演奏会に出演するという、これも大変な無謀なことをしたと思っております。

私はプロテスタント・メソジスト系の牧師をして50年になろうとしております。現在は川崎市の小さな教会で牧会をしており、毎週の礼拝(日)と祈祷会(木)の説教や月一度の家庭集会や聖書研究会での話をしなければなりません。世間的な表現では「老骨に鞭を打って」忙しく励んでおります。

というわけで、毎週の練習は肉体的に無理なので、今年3月で合唱は辞めようと思っていました。ところが当団のホームページを見て、日本語でバッハを歌い、現在は《マタイ受難曲》の練習をしていることを知り、《ヨハネ》を歌ったのだから《マタイ》も歌いたいという心を抑えきれずに、つい目白の練習を見学してしまっただけでした。それが本日の演奏会の出演となったわけでした。

私は若いころから気が向くときには、フルートでバッハの《G線上のアリア》、《主よ人の望みの喜びよ》、《管弦楽組曲2番》など「下手の横好き」で吹いておりました。そしてバッハの器楽曲のCDを集めて楽しみ、《平均律クラヴィア曲集》、《ゴルトベルク変奏曲》、《フーガの技法》、《アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳》等々、いろいろな演奏者で聞いておりました。

それが今は、バッハの声楽曲、とくに「教会カンタータ」を聞かない日はない、「カンタータな日々」「カンタータの森を歩む毎日」ということになっております。そのきっかけを作ってくださったのが私たち家族のホーム・ドクターのクリスチャンの女医さんでした。私がクラシック音楽が好きで、その先生もご自分の教会の聖歌隊の指揮をしておられ、指揮者・西本智美のファンなので素人も参加できる、西本智美指揮の第九コンサートと一緒に参加を誘われました。そこでドイツ語で合唱の練習に参加しているうちに、シラーの歌詞の意味がだんだんと分かって来ると何か虚しさを感じるようになりました。ザイト・ウムシュルンゲン・ミリオーネン・ディーゼン・クス・デル・ガンツェン・ヴェルト(受けよ・わが抱擁を・幾百万の人々よ・この口づけを・全世界に)、私はこの様な詩の世界にはま



■リハーサル風景 (撮影・松尾茂春)

《マタイ受難曲》、入門の入門。

日時：5月19日(土) 14:00 開演

会場：日本キリスト教団・荻窪教会

合唱と朗読：東京バッハ合唱団、オルガン：金澤亜希子

指揮/訳詞：大村恵美子

主催：東京バッハ合唱団 (入場無料)

抜粋 (日本語演奏)

合唱=1, 29, 68 レチタティーヴォ=19, 67

コーラル=(1), 3, 10, 15, 17, (19), 25, (29), 32, 37, 40, 44, 46, 54, 62

まったく興味をもてなくて、演奏会で歌っていても白けた気分でした。

そのころ、以前の教会の会員が団員であった某合唱団の《ヨハネ受難曲》の練習の見学で聞いたドイツ語の歌詞が、〈クロイツィゲ・クロイツィゲ (kreuzige! kreuzige!)〉と、民衆がピラトにイエスを十字架につけることを求める叫びだったのでした。「ああ、これは聖書のことばだ！ どうせドイツ語で歌うのなら聖書のことばを」と思い、その合唱団に入団したのでした。しかし、ドイツ語で歌っていても、簡単な単語は理解できても、長い文章は、歌いながら頭の中では忙しく翻訳しながら歌っているの、音程もリズムも狂い、何よりもバッハの伝えようとしたメッセージを味わうにはほど遠い有様でした。

そのような時、当団のホームページのなかで大村恵美子先生の「日本語でバッハを歌う」という文章を読んで、全く同感しました。これを讃美歌に置き換えてもよいと思います。(慈しみ深き 友なるイエスは) (讃美歌312)を What a Friend we have in Jesus と歌っても、イエス様を身近に思うことは出来ません。それにくらべ、本日の演奏会でも歌ったいくつものコーラルの歌詞は、ストレートに私の心に入ってきて、私は何度も心の中で「アーメン」と言ったことでした。また、ただ単に日本語であればよいというものではなく、大村恵美子先生の日本語は一昔前の「文語体聖書」の格調の高い日本語であることが、私にとってはとてもピッタリなのです。なぜなら、私が信仰をもったのは文語体聖書をつかう教会でのことであり、3年間の神

学校も文語体聖書で学んだので、文語体のことばが私の血となり肉となっているからです。

さて、本日の《マタイ受難曲》の抜粋演奏の中のコーラルに、5回、讃美歌136（血潮したたる、主のみかしら）の曲がありました（第15, 17, 44, 54, 62曲）。私はそのメロディーを聞きたくてソプラノさんの方に耳を傾けていましたが、今ひとつ響いて来なかったのが残念でした。なお、バッハはよほどこのメロディーが好きとみえて、私が聞いた下記のカンタータに使われていました。

- ① 《クリスマス・オラトリオ》
- ② BWV135 《ああ主よ、あわれなる罪人のわれを》
- ③ BWV153 《主よ 見たまえ わが敵は》
- ④ BWV159 《見よ、われらエルサレムに上り行かん》
- ⑤ BWV161 《来たれ、汝甘き死の時よ》

まだ他にもあるかも知れませんが……。

最後に聖書の朗読で感じたのは、小海基牧師のすばらしいイエス役でした。さすがプロだと思いました。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」が今も私の耳に残っています。（妄言多謝）

《マタイ受難曲》、入門の入門。

はじめに（レジュメ）

◎受難曲の3種類の素材

バッハが、《マタイ受難曲》を作曲しようとしたとき、彼の前に置かれた素材は、福音書、コーラル、自由詩、の3種類のテキストでした。

きょうは、受難節を迎えているライプツィヒ市民になったつもりで、彼の仕事を想像していただきます。

福音書は、福音書記者（エヴァンゲリスト）マタイによって書かれた（とされる）受難の記事の全文、すなわち「イエスはこれらの言葉をすべて語り終えると…」(26章1節)から、「そこで、彼らは行って墓の石に封印をし、番兵をおいた」(27章66節)までで、これはルター訳のドイツ語で書かれています。われわれの国語はドイツ語ですから、こどものころから読み聞かせられて耳になじんでいる、受難の物語がそこにあります。バッハは、〈イエス かたり終えたるのち〉(上の箇所の大村訳)と読み上げながら、節をつけていきます。《マタイ受難曲》の物語は、このエヴァンゲリスト（テノール）によって、つぎつぎと朗唱されながら進行していきます。

コーラルは、曲中に全15回登場することになりますが、そのうちの7回が、パウル・ゲールハルトというルターの改革から1世紀をへたドイツ三十年戦争の

さなかの牧師によって作られたものです。彼はバッハが生まれる10年ほど前に亡くなっています。われわれ一般の市民はそんなことは知りませんが、とにかくバッハがこの詩人を好んだように、この人のコーラルはわれわれ（ライプツィヒ市民）の間でも大人気で、受難節の今は、どの家庭でも朝から晩まで、何節にもわたって歌い親しまれています。ほかの受難節コーラルも同様です。

レチタティーヴォやアリアの部分にあたる自由詩は、ライプツィヒ時代のバッハに多くの歌詞台本を提供することになる、ピカンダーという詩人によって書き上げられました。福音書の記事のどこにコーラルを挿入し、どこでアリアを歌わせ、という進行全体をピカンダーが指示したのか、バッハが主導したのかは、よく分かりません。いずれにしろ、今週の金曜日（1727年4月11日）に、トーマス教会の受難礼拝で初演を聴くまでは、これらの自由詩部分だけが、われわれの耳に新しい素材となるわけです。

◎本日のコンサートのねらい

というわけで、《マタイ受難曲》の二つの柱である福音書とコーラルとは、バッハにとってもわれわれにとっても、同じ親しみをもって共有されています。われわれは、エヴァンゲリストの語りは、すみからすみまで知り尽くしていますし、コーラルの旋律が鳴り出せば、歌詞が口をついて出てきます。演奏の途中で弁当を食べていても、気に入りの場面になれば、さっと振り返って、おとわや！と声をかけるのです。そうではない人がいる、ということ、トーマス学校の執務室で最後の仕上げにかかっているカントーラは、想像することすらできないでしょう。

きょうのコンサートのねらいは、作曲家と聴衆が共有している素材に親しむことによって、300年前のライプツィヒ市民が《マタイ受難曲》の初演に立ち会う前の、こころの財産の状況に、わずかだけでも近づいておいてみようとするものです。

福音書は、団員が配役を分担して、われわれの言語で朗読します(新共同訳)。コーラル(大村恵美子訳詞)は、オルガン伴奏でまず合唱団がうたい、ひきつづき皆さんと一緒に繰り返して歌います(台本と楽譜があらかじめ聴衆に配られている)。このスタイルは、「受難楽」が成立する過程で、ごく自然に試みられていたものであることを付け加えておきます。

お帰りになったあとも、台本の福音書の記事を追いながら、コーラルに親しんでおいてください。本番は来年3月30日、紀尾井ホールで、もちろん全曲を、ソリスト、オーケストラとともに演奏します。みなさんは、バッハが望んだとおりの、《マタイ受難曲》の理想の聞き手になっていらっしゃるはずです。では、来年の受難節にお目にかかりましょう。(大村健二)



Botschaft
der Bundesrepublik Deutschland
Tokyo

Grußwort

anlässlich des 50-jährigen Jubiläumskonzerts
des Bach-Chors Tokyo

Es freut mich außerordentlich, dass der Bach-Chor Tokyo in diesem Jahr sein 50-jähriges Jubiläum feiert. Der traditionsreiche Chor beschäftigt sich seit seiner Gründung im Jahre 1962 ausschließlich mit den Werken J.S. Bachs. Er blickt auf mehr als 200 Konzerte und zahlreiche Deutschlandreisen zurück. Seine Konzerte genießen breite Anerkennung und nehmen einen festen Platz im japanischen Konzertkalender ein.

Besonders hervorzuheben ist das große Engagement und die langjährige Arbeit der Dirigentin Emiko Ohmura, die den Bach-Chor Tokyo 1962 ins Leben gerufen und eine Vielzahl von Bachs Werken ins Japanische übertragen hat. Die Konzerte des Bach-Chors sind ein wichtiger Beitrag zur breiten Palette unseres musikalischen Austausches. Ich bin mir sicher, dass wir bei der weiteren Entwicklung der bereits heute schon engen musikalischen Bindungen zwischen unseren beiden Völkern auf dieses Fundament bauen können.

Das Jubiläumskonzert steht unter der Schirmherrschaft der Deutschen Botschaft, was uns mit Freude und Stolz erfüllt. Meine Anerkennung und mein Dank gilt den Künstlern und den Organisatoren dieses Jubiläumskonzerts, die mit viel Enthusiasmus und Engagement eine besondere musikalische Leistung zeigen. Allen Zuhörern wünsche ich einen großartigen Musikgenuss und den Musikern und Organisatoren viel Erfolg für das Konzert.

Pit Heltmann
Botschaftsrat
Leiter der Abteilung für Kultur und Öffentlichkeitsarbeit
Deutsche Botschaft Tokyo

ご挨拶

創立 50 周年記念公演に寄せて

ドイツ連邦共和国大使館 広報文化部長
ピット・ヘルトマン

このたび、東京バッハ合唱団が創立 50 周年を迎えられますことを大変うれしく思います。長い伝統を誇る同合唱団は、1962 年の創立以来、J. S. バッハの作品に専念し、200 回以上のコンサートと数多くのドイツ公演を開催されました。そのコンサートは幅広い評価を得ており、日本の演奏界において確固たる位置を占めております。

特筆すべきは、東京バッハ合唱団を 1962 年に創設され、バッハの作品を数多く日本語訳された指揮者・大村恵美子様のご多大なご功績です。同合唱団のコンサートは、音楽分野における日独交流の多彩さを支える大切な支柱であります。日独両国間の音楽の絆はすでに密接なものでありますが、これを礎として、今後なお一層、緊密なものになると確信しております。

このたびの創立 50 周年記念コンサートは、ドイツ連邦共和国大使館後援のもとで開催されますが、このことを喜ばしくかつ誇りに思います。本公演で多くの熱意とご尽力をもって格別の音楽を披露される、出演の皆様と主催者の方々に賞賛と感謝の言葉を捧げます。ご来場の皆様には、素晴らしい音楽を満喫されますことを願いますとともに、演奏者と主催者の皆様にはコンサートのたいなるご成功をお祈りしております。

次回公演のご案内

創立 50 周年記念公演 [2] 第 107 回定期演奏会

●日時：
2012 年 11 月 9 日（金）
19:00 開演

●会場：
杉並公会堂大ホール

●演奏曲目：
《クリスマス・オラトリオ》第 I・II・III 部
カンタータ第 71 番《主は わが君》

●後援：
ドイツ連邦共和国大使館

●チケット発売開始：
前売り 3500 円 全席自由席（当日 4000 円）

事務局までお申込みください。郵便振替用紙を同封のうえ、お送りいたします。

後援会員の皆様には、9 月中に、招待状をお届けいたします。今からご来場のご予定をお願いします。



練習スケジュール（再録）

5 月 21 日（月）より

練習開始

《クリスマス・オラトリオ》第 I-III 部、カンタータ第 71 番《主は わが君》（新規、OB/OG 参加歓迎）

8 月中の通常練習は夏季休暇

8 月 2 日（木）～5 日（日）

野尻湖合宿

野尻レイクサイドホテル（旧・野尻湖ハウス）
（参加、滞在期間、宿泊先とも自由。詳細は続報）
8 月 4 日（土）

野尻湖コンサート、16:00 開演、神山教会
《クリスマス・オラトリオ》前半抜粋、他

8 月 11 日から 4 回の土曜

《マタイ受難曲》短期強化練習

4 回とも 13:00 - 18:00、5 時間、会場＝荻窪教会
8/11（土）第 1 部（第 1 曲～第 29 曲）
8/18（土）第 2 部（第 30 曲～第 68 曲）
8/25（土）小合唱中心
9/1（土）全体仕上げ（新規、OB/OG 参加歓迎）

9 月 3 日（月）より

練習後期開始（土曜会場は荻窪教会に変更）

《クリスマス・オラトリオ》第 I-III 部、カンタータ第 71 番《主は わが君》（新規、OB/OG 参加歓迎）